

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

* 三鷹光器製シーロスタット OS-M 收藏

三鷹光器株式会社は1966年(昭和41年5月)に東京天文台(国立天文台の前身の一つ)にいた中村義一氏が始めた会社で、天体望遠鏡、ロケット・人工衛星搭載機器、医療機器、無接触3次元測定器など幅広い先端機器を製作している会社である。筆者がロケット搭載観測器の開発をやっていたころ一緒に仕事したこともある天文台には縁の深い会社である。今回、三鷹光器が40年前に制作したシーロスタット(写真1)が会社に戻ってきたので、国立天文台の展示室に譲りたいとの話が、国立天文台で天文機器資料館などに歴史的な貴重な天文資料を収集している筆者に伝えられたので譲り受けた。

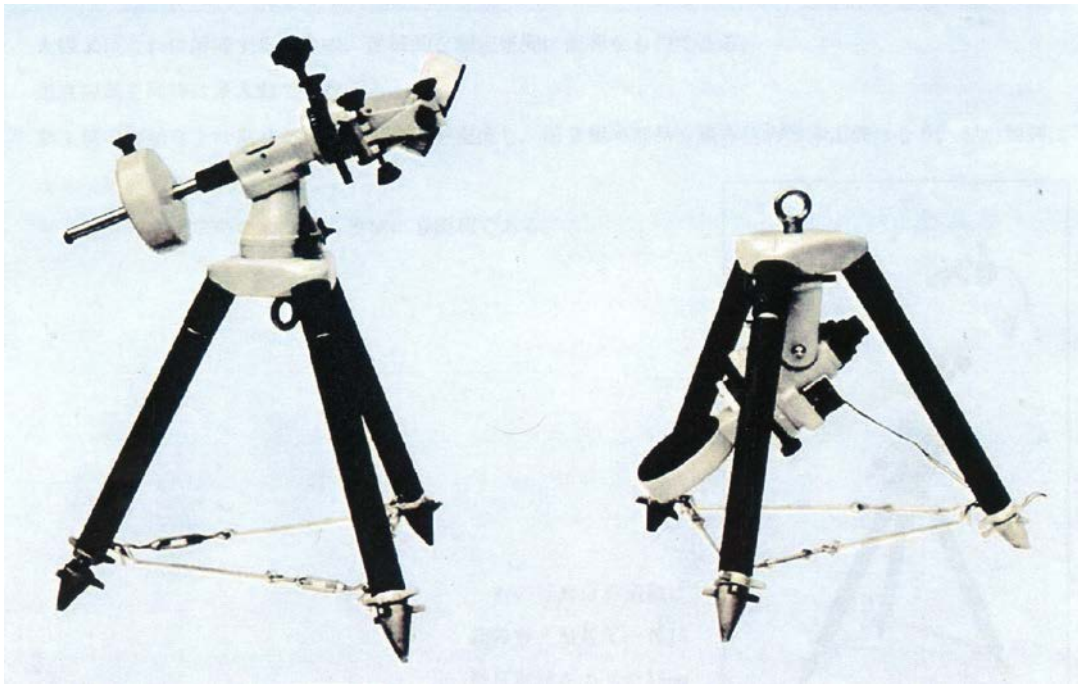


写真1 三鷹光器製シーロスタット OS-M

三鷹光器製の望遠鏡はアマチュア天文の仲間では「垂涎の望遠鏡」と言われたほどの名器と言われていた。写真1で見ると、シーロスタットは望遠鏡の形はしていない。シーロスタットは、主に太陽観測に用いられ、2つの平面鏡を使って一定の方向に太陽の光を導く装置である。平面鏡2枚で構成されているのでシーロスタットでは像は結ばない。

写真1では右の上に向いた鏡が第1鏡で、極軸に平行に置かれ、日周運動の半分の速度で回転させ、第1鏡の反射光を適当な位置に置いた第2鏡(写真1では左の3脚に載せた鏡)で真下とか、真横の一定の方向に導く。国立天文台にもいくつかシーロスタットが設置されている。太陽塔望遠鏡のシーロスタットが写真2である。

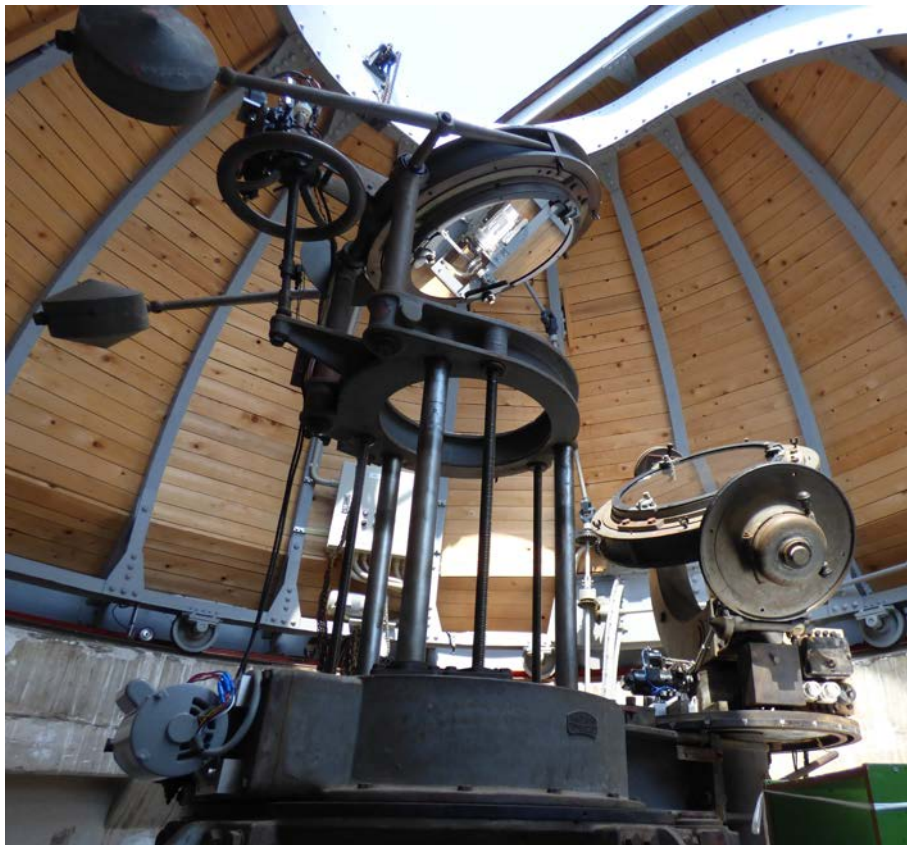


写真2 国立天文台アインシュタイン塔のシーロスタット

今回収蔵したシーロスタット OS-M は、写真2のような据え付け型の大型のものではなく、簡易型で任意の場所に設置できるタイプで口径は12 cmである。このシーロスタット OS-M のカタログに載っている図1が使い方としてはよくわかる図である。

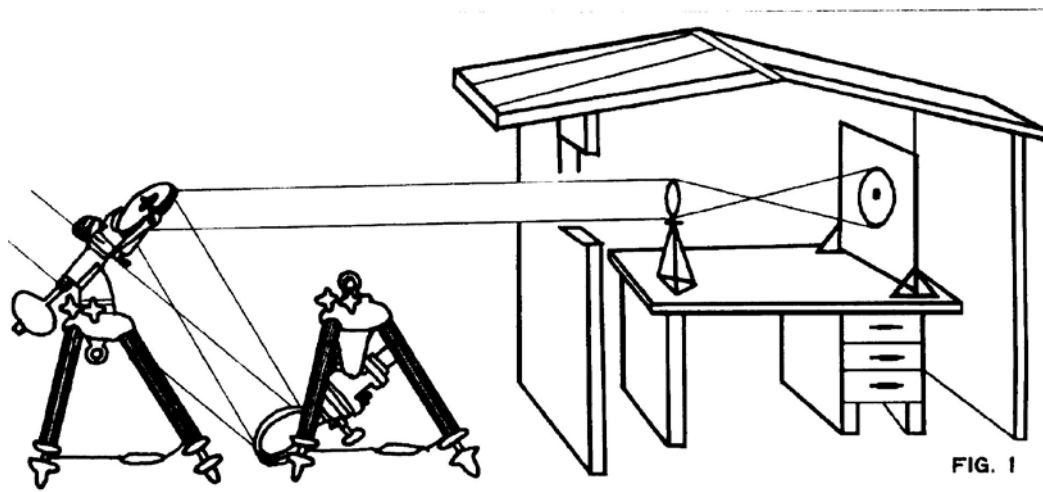


図1 カatalogに示されている使用例

図1に示された例は、太陽の光を真横に導き、小屋の中の観測装置に太陽の光を送っている。このような使い方は日食時の観測装置によく使われる。

写真2の太陽塔望遠鏡の場合には、図2のようにシーロスタットの光は真下に導かれ、塔の櫓が望遠鏡になっており、地下の分光器に導かれる。

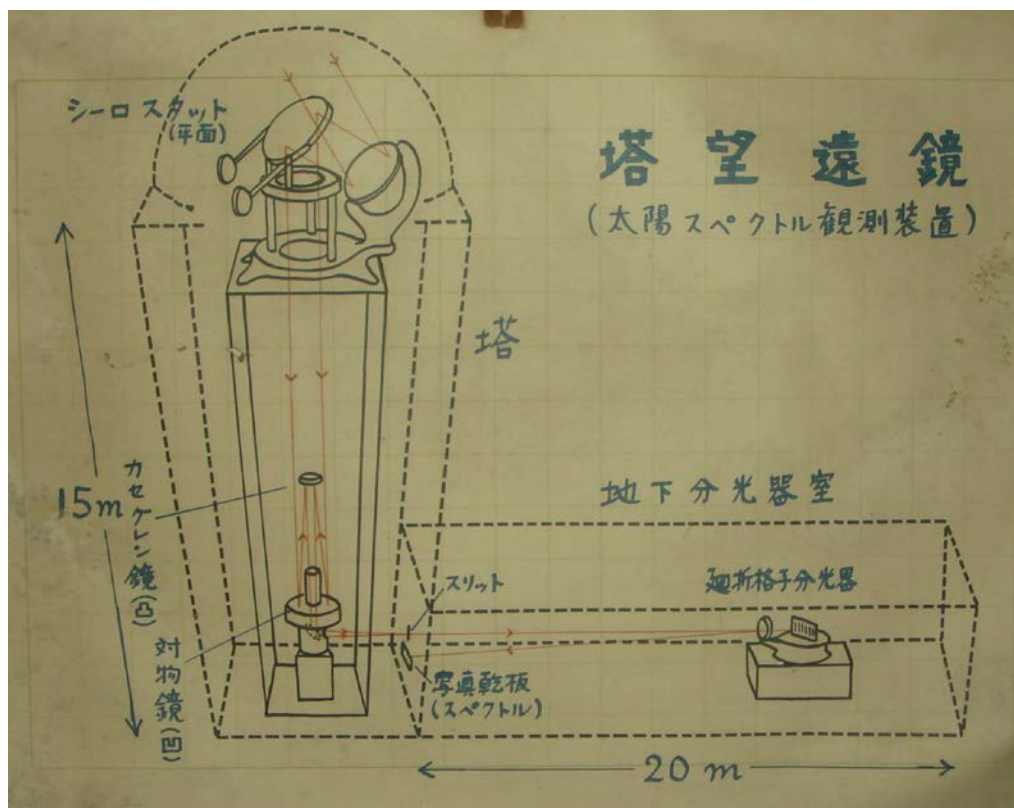


図2 国立天文台のアインシュタイン塔の説明図

譲り受けたシーロスタットは太陽塔望遠鏡地下の分光器資料館に展示しておこうと思う。

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp